

第1部 都市近郊農村のよりよい生活環境を目指して —加古川市東神吉町神吉山を中心とするフィールドワークから—

神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域

矢嶋 巖

神戸学院大学人文学部人文学科地域社会領域

2016年度地域社会専攻演習Ⅲ（矢嶋ゼミ）履修生

I はじめに

本報告は、神戸学院大学地域研究センターの明石グループにおける研究課題である「都市郊外地域における環境・社会が有する価値についての研究」の一環として行なわれた、2016年度地域社会専攻演習Ⅱ・Ⅲ履修学生である、地域社会領域矢嶋ゼミ3回生15名による研究結果をまとめたものである。

神戸学院大学地域研究センター明石グループ都市郊外班では、都市化村落などの都市郊外地域における残存する種々の環境的・社会的要素とその価値を評価し、地域住民の生活においてその価値が再発見、再評価されることをめざし、地域住民との協働を図りながら、兵庫県加古川市西神吉町を中心とする加古川西部地域において研究を続けてきた。

本研究は、対象地域において、地域持続のための糧となる魅力を見つけて活動をしている人たちや、魅力とまでは位置づけずに活動している人たちに対して、学生が聞き取り調査を行ない、それらの活動の意味とさらなる可能性について考えようとしてきた。

本研究課題による夏季研究調査は、2010年度人文学部人文学科人間環境コース矢嶋ゼミ4回生長尾貴人君による卒業研究「カイボリから見たため池と地域住民との関わりについて—兵庫県東播磨地方を事例に一」に端を発するもので、地域研究センターの研究としては、2011年9月に実施した人間環境コース2011年度矢嶋ゼミ3回生による加古川市西神吉町鼎四地区を対象とした研究、2012年度人間環境コース矢嶋ゼミ4回生鈴木晨平による卒業研究「都市郊外近郊農村における農業の持続と活性化—兵庫県加古川市西神吉町鼎を中心に一」、2013年9月に実施した人間と社会コース現代社会領域2013年度矢嶋ゼミ3回生による加古川市の加古川西部地区における研究、2014年9月に実施した人間と社会コース現代社会領域2014年度矢嶋ゼミ3回生による加古川市西神吉町鼎富木地区における研究に引き続くものである。

2014年度における研究では、西神吉町鼎富木地区において悉皆調査を行ない、同地区を通じて、東播磨地域の都市近郊農村が抱える課題を浮き彫りにすることを試みた。その研究の後である2015年度に、いったいどのような研究がなされるべきかについて検討し、富木地区が位置する西神吉町を含む加古川西部地域の都市近郊農村が抱える複数の課題を念頭

に置き、それらに一定程度通用する提案を行なうことを目標にすることを考えた。2015年度には、人口が減少局面に転じた大都市圏周辺域の兵庫県加古川市西神吉町とその周辺地域の都市近郊農村において、地域持続のための糧となりうる宝物を見いだして活かそうとする取り組みや、今後活かすことが可能と思われる要素を、地域の宝物として位置づけて取り上げ、それらを通じて、都市近郊農村の将来のあり方について考えることとした。その際、祭り、災害（記録）、建築・景観、農産物・野外活動の5テーマを設定した。

研究対象とする取り組みには、これまでの研究調査から、本地域において地域持続のための糧となり得る要素といえるもので、なおかつ2015年度の学生の関心から、祭り、災害（記録）、建築・景観、農産物・野外活動の5テーマを設定した。これらのうち、祭り、史跡・名勝、建築・景観については、地域持続につながる重要な要素でありながら、これまでの研究では十分に把握できていなかった。また、災害（記録）、農産物・野外活動については、これまでの研究において部分的に取り上げたことがあるに過ぎなかった。そこで、これらについて、新規に取り上げたり、より踏み込んだり、あるいは対象地域をやや広くしたりした調査を行ない、地域持続のための宝物として検討した。

2016年度は、2015年度の研究から派生して研究課題を設定した。すなわち、地域の宝物として、里山とそれにおける野外活動に価値を見いだそうとした。具体的には、加古川市東神吉町神吉の神吉山において行なわれている里山保全活動である、ふれあい里山会神吉の取り組みを取り上げた。2015年度の研究でお世話になった神吉町内会の喜多太美男会長を通じて、ふれあい里山神吉の小山重示氏にコーディネーター役を依頼してふれあい里山会の皆様にご紹介頂き、2016年9月14～16日にかけて合宿調査を行なって、神吉山における里山保全活動を取り巻く状況や神吉山の環境についての把握に努めた。これに基づき、地域における神吉山の活動の位置づけをさらに高め、より多くの住民が活動に関心を持つための方策について考えた。研究にあたっては、ゼミ生の関心も考慮し、コミュニティ班（II章）、スポーツ班（III章）、生物班（IV章）、歴史班（V章）、広報班（VI章）に分け、コミュニティ班が研究の導入的役割を、広報班が研究を基にした総合的提案の役割を担うようにした。

本研究にあたっては、神吉町内会ふれあい里山会神吉のみなさまの多大なるご協力を得た。また、これまでの研究同様、富木営農組合長の富木攻氏のほか、東播磨地域ビジョン委員の赤堀敬二氏と菅原悦夫氏のご協力を得た。そして、ふれあい里山会神吉の協力を得て、神吉山でウォークイベントを開催している、加古川ウエルネスパークの緒方勢吉館長をはじめとする職員の皆様、2015年度の研究でもお世話になった神吉地区在住の歴史家久保一人氏にもご協力頂いた。さらに、兵庫県東播磨県民局総務企画室ビジョン担当のご尽力で、本研究の中間報告を、2016年12月11日に兵庫大学において開催された兵庫県東播磨夢会議において、東播磨地域における学生の活動事例として、報告させて頂く機会を得、研究を推進させることができた。以上を記して、厚く御礼申し上げます。

（矢嶋 巖）

Ⅱ 里山を生かした過疎化地域の課題対策

コミュニティ班

鎌田 慶・田尻 仁・矢崎 瞳

1. はじめに

環境省ホームページの「里地里山の保全・活用」によると、里山とは、原始的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域である。その環境は農林業などに伴うさまざまな人間の働きかけを通じて形成・維持されてきた。また里山は、特有の生物の生息・生育環境として、食料や木材など自然資源の供給、良好な景観、文化の伝承の観点からも重要な地域とされる。しかし、近年里山の多くは人口の減少や高齢化の進行により、手入れされなくなった結果、生物多様性の悪化が懸念されている。

人口の減少や高齢化の進行は、同時に空き家問題や独居老人問題にも関係する。総務省ホームページの「空き家の適正管理に関する調査（地域計画調査）結果報告書」によると、近年、空き家は全国的に一貫して増加傾向にある。その原因には人口減少があげられている。また、所有者等による適正な管理が行われず、放置されたままとなっているものが増加しており、老朽化による屋根材の飛散、不審者の侵入、ゴミの放置など、防災、防犯、衛生、景観等の面で地域住民の生活環境に深刻な影響を及ぼしている。そのため地域における喫緊の課題となっており現在さまざまな地域で空き家対策が行われている。具体的には、主に市区町村が定住を促進するために空き家を紹介する空き家バンクという制度を設けたり、空き家を改装して店舗として活用したりしている。また、過疎化で人口が減少し高齢化も同時に進行することにより、独居老人の問題を抱えている地域では、高齢者のコミュニケーション施設として空き家を活用している例もある。

兵庫県では、空き家対策の一環として空き家活用支援事業を行っている、兵庫県ホームページの「地域再生大作戦の展開」によると、この事業は農山村部や都市部の一戸建て空き家を、住宅や事業所、地域交流拠点として活用するための改修費等を助成する事業である。

独居老人も全国的に増加傾向にある。総務省ホームページに掲載されている「高齢者の社会的孤立の防止対策等に関する行政評価・監視結果報告書」によると、多くの高齢者は、健康状態、経済状況とも問題はなく、生きがいを感じて日常生活を送っている。しかし、認知症などにより、介護保険や生活保護などの行政サービスを理解できなかったり、これらの行政サービスを拒否したりする人もいる。健康や生活に問題を抱えている状況にもかかわらず、必要な行政サービスを受けず、家族や地域社会との接触もほとんどないなど、社会から「孤立」する高齢者が存在している。高齢者の「孤立」は、場合によっては「孤立死」という悲惨な結果を招く恐れもある。このため、一人暮らしの高齢者の家を訪

問し安否確認を行っている地域もある。

矢嶋ゼミでは2016年9月14日～16日の3日間にかけて加古川市東神吉町神吉において神吉山の保全活動に関する聞き取り調査を行った。その結果、神吉町内会では、その象徴である「神吉山」の保全問題に加えて、空き家、独居老人の問題を抱えていることが分かった。そこでコミュニティ班では、里山を生かしつつ独居老人、空き家問題を解決する方法について考えていきたい。その際、これらの問題解決を里山の保全に繋げることを考える。

研究は以下の通りに進める。2節では、全国各地で行われている里山を生かしたコミュニティ活動の実施例を紹介する。3節では、神吉町内会の喜多太見男さんへの聞き取りにもとづいて神吉町内会の特徴と抱える問題について述べる。4節では、里山保全活動を行う、ふれあい里山会の小山重示さんへの聞き取りにもとづいて、ふれあい里山会の特徴と抱える問題について述べる。以上を踏まえ、5節では神吉山の保全と空き家、独居老人の問題解決につながる提言を述べる。

2. 里山を生かしたコミュニティ活動の実施例

コミュニティ班では、里山保全と過疎化の改善するためには、コミュニティ組織が主体となって自然に触れる活動を行うことが重要な方法の1つだと考える。

ここでは教育機関や行政との連携・交流により、里山を生かして様々な方法で地域を活性化させ、過疎化対策に取り組んでいる地域を紹介していく。

兵庫県企画県民部県民生活課が運営する、すごいすとホームページの「すごいすと取材記」には加古川市志方町の大藤山ボランティアグループ会長のインタビューが掲載されている。それによればこのグループは大藤山の保全に取り組んでおり、ボランティアグループは氷室地区の住民で構成されている。大藤山は環境省の「生物多様性保全上重要な里地里山」に選ばれている山で、グループの活動のひとつは、里山である大藤山の保全活動を行うほか、のどかな田園風景を活かした地域の魅力として、野菜やソバの栽培を行なっている。また公民館の一室を利用してふれあい喫茶を行っており、地域の憩いの場となっている。別の集落から足を運ぶ人もおり、グループの女性会員たちが接客する。このように大藤山グループは里山の保全活動から派生し地域の憩いの場を提供するコミュニティ組織となっているといえる。

きほくふるさと体験塾ホームページの「紀北町ってこんな町」によると、三重県紀北町は県南部に位置し、人口は約2万人の町で、世界遺産・熊野古道には毎年多くの観光客が訪れるが、過疎化と里山の保全の課題を抱えている地区がある。

農林水産省東海農政局ホームページの「食と地域の交流促進対策交付金・平成23年度優良事例」によると、紀北町の下河内地区には、下河内の里山を守る会ときほくふるさと体験塾という里山の保全に取り組んでいる2つの団体がある。前者は、2003年に行政からの声かけで、過疎化・高齢化の進行に対して地域活性化に取り組むために結成された団

体である。三重まるごと自然体験ホームページによると、後者は世界遺産熊野古道や清流銚子川など、町内の海・川・山のフィールドで様々な自然体験活動を実施している。

総務省ホームページの「市町村の活性化新規施策 100 事例（平成 22 年度地域政策の動向）」によると、紀北町には昔ながらの里山が残されていたが、過疎化により人口が激減し、空き家や遊休農地が増え始めた。そこで紀北町は先程の 2 つの団体、下河内の里山を守る会・きほくふるさと体験塾と協力し、「きほく里山体験笑楽校」を設立した。ここでは空き家や遊休農地を利用し、農業体験やそば打ち体験等さまざまなイベントを実施している。その際他地域との交流拠点であった施設を整備・復活させ、そば打ち道場として常時体験ができる環境を整えて、会の活動拠点として利用した。里山の雰囲気を守ると同時に、利用されていない建物を利用することにより、景観も守ることができ、なおかつ交流人口の増加にもつなげられる。このような取り組みを行ってきた結果、1 年間の交流人口が 400 名を超え、下河内ファンの獲得、紀北町の PR にもつながっているという。

教育機関と連携し里山保全活動に取り組んでいる例では、滋賀県彦根市の例が挙げられる。中日新聞 2012 年 5 月 14 日の記事によれば、彦根市では「彦根市中南部まちづくり協議会」が 2005 年 8 月から荒神山の環境整備を進めるボランティア団体「荒神山・人と森の会」を設立した。地元の彦根工業高校の生徒と一緒に取り組めないかと学校に依頼し、2007 年から協働による整備作業が始まった。協働作業内容は荒廃した荒神山の森の間伐による景観の改善や遊歩道の整備である。斜面を間伐することによって、整備した遊歩道から琵琶湖が眺められるようになった。その後、生徒たちは専門分野の建築を生かし、山頂近くに屋根付きの休憩場をデザインし、市が建設した。さらに彦根市は木製ベンチを製作し、見晴らしの良くなった遊歩道に設置し、琵琶湖の眺望を楽しめるようにした。その後も建築コースの工業高校の生徒有志 8 人が先輩たちの森林整備を受け継いで、ベンチ作りを開始したという。

以上のように、全国各地に里山を活用したコミュニティ組織が存在する。これらの事例は里山の保全活動から地域交流に派生した場合や教育機関との連携に広がった例として挙げられる。また、地域住民の地域に関する意識が高まったことや、他の地域からの観光客が増加し、地域が活性化した例としても挙げられる。

3. 神吉町内会の特徴と抱える問題

『かんきの要覧』によると、神吉町内会は、1,087 戸、人口約 3,200 人、隣保数 63 区域の町内会である。町内会は評議委員、町内会各委員会・部会、女性部会、隣保長会、屋台青年会、老人会、少年団、ふれあい里山会の組織および所属団体で構成されている。そして、町内会に直属する団体、及び関連団体には、神吉水利組合、神吉農会、神吉神社、那須与一地蔵溝、神吉八幡神社、大池土地改良区、上部土地改良区加古川西土地改良区、農業委員会、農協理事会、消防団がある。また、1991（平成 3）年の地方自治法の改正により「認可地縁団体」に法人格が付与されたことに伴い加古川市に申請し 2009 年に認可さ

れ、法人化されており、町内会所有の財産（建物、土地、財産区土地）がある。町内会への加入は任意であるが、町内会長によると加入率は高く、2016年度の加入者は5名であったとのことである。

主な行事としては、神吉町内クリーン作戦、天神さん夏祭り相撲大会、盆踊り、秋祭り、神吉山ウォーキング、とんど祭り等を行っていて、その中でもとんど祭りには700名もの参加者がいるとのことである。

以上のように神吉町内会の特徴としては、規模が大きく、町内会の構成人数も多い。また行事の参加率も高く比較的活気のある町内会であるといえるだろう。また、加古川市のソーデーマーチや神吉山ウォーキングの際は、神吉町内会の評議員、社会教育推進委員、女性部がお茶の接待をするなど、市と連携してイベントを行っている。

一方で聞き取り調査の結果から、次のような課題があることが分かった。現在町内会には約80軒の空き家があるが、加古川市も空き家バンク制度を設けているが、私達が調べた範囲では空き家バンクの登録欄に神吉地区の空き家はなかった。また、町内会は約100人の独居老人を把握しているが、市の管轄であるため個人情報保護の点から、町内会としては対応しにくいそのため、現在の取り組みとしては、民生委員、女性部、老人クラブが担当する、ゆうあい訪問見守り事業により、1か月に2回の見回り活動をしているとのことである。しかし、現状は助けが必要な人が自らSOSを出すことにより、市の担当者に来てもらっているとのことである。町内会長としては、身近な人に高齢者への関心を高めてもらって交流を持つようにすることで解決していきたいとのことである。



写真1 神吉山から見た神吉地区

2016年9月15日鎌田撮影

4. ふれあい里山会の特徴と抱える問題

神吉山は、北山・中山・行者山・小山（前山）を総称して神吉山という。神吉町内会が発行する『かんきの要覧』によると、神吉山はかつて入会地であり、明治維新の時に官有地となるまでは住民が日常的に利用していた。しかし、1877（明治10）年に官有地であった神吉山は、他県の人に払い下げとなってしまった。その後1887年に惣代人（地域を代表する者）神吉長次氏が、村民からの寄付を募り神吉山を買い戻した。1945（昭和20）年頃、神吉山は焚き木や薪を集めるために住民に使用されていた。その後、時代の変化と共に神吉山を利用する人は減少し、次第に放置されるようになった。ふれあい里山会の小山重示さんによれば、そこで保全のために兵庫県の補助を受け、町内会の一部としてふれあい里山会を設立することとなった。写真2は、その補助金により設立された小屋であり、活動拠点となっ

ている。

また小山さんの話によると、兵庫県の住民参画型森林整備事業の一環で、県下約 120 か所の里山を整備しようとした際に、神吉山も整備対象となり、兵庫県の県民緑税から資材費等として約 350 万円の補助を受け、ふれあい里山会の設立に至った。

ふれあい里山会は主に 60 歳以上の男性で構成されており、女性はわずかしかない。ゲストとして兵庫県東播工業高等学校の生徒が参加している。神吉山の整備や管理は、ふれあい里山会のメンバーによってボランティアで行われており、年に一度、草刈りや、用水路の清掃をしているとのことである。小山さんによると、立ち上げの際に、道具や活動拠点となる小屋を準備するための費用がかかったが、現在はボランティアで活動しているとのことである。

主な活動は、神吉山ウォーキングを行うための道路整備のほか、小学生を対象にした植樹や炭焼き・クラフトのイベントなどである。文部科学省の小学校学習指導要領の社会編によれば、自分たちの地域について 3 学年

及び 4 学年は地域について学ぶことになっている。小山さんによると、このことがきっかけとなり、植樹のイベントが始まったとのことである。このイベントにより、これまでにサツキを 300 本植えた。また、関西電気保安協会や株式会社神戸製鋼所などの企業と連携し、ふれあい里山会として加古川医療センターの敷地にも植樹を行なったとのことである。

ふれあい里山会の方々に、神吉山やふれあい里山会のこれからについて話を聞いたところ、神吉山に遊びに来る子どもが少ないことや、若い人に山への興味を持ってもらいたいということ、ふれあい里山会が参加しやすいグループになって幅広い世代間の交流を深めたいなどの意見が挙がった。これを受けてコミュニティ班は、町内会もふれあい里山会も、若い人も高齢の方も、すべての人が活躍し、若い人を呼び込める神吉山の保全活動の取り組みが必要だと考えた。

5. おわりに

本研究では、里山を生かしつつ独居老人、空き家問題を解決する方法について考えてき



写真 2 ふれあい里山会的小屋

2016 年 9 月 15 日田尻撮影



写真 3 炭焼きをしている様子

2016 年 9 月 15 日田尻撮影

た。2節では、全国各地に里山を活用したコミュニティ組織が存在する事例を紹介した。これらの事例より、里山を娯楽の場として提供することにより、地域住民の地域に関する意識が高まったことや、他の地域からの観光客が増加したことなど、地域が活性化した例が多くみられることがわかる。3節では、神吉町内会長の喜多さんへの聞き取りから見えた神吉町内会の特徴と抱える課題を紹介した。聞き取り調査から、神吉地区は空き家や独居老人の問題を抱えていることが分かった。4節では、ふれあい里山会の小山さんへの聞き取りと、かんきの要覧から見えた、ふれあい里山会の特徴と抱える課題を紹介した。ふれあい里山会は、神吉山の保全活動として整備を行うほか、小学生を対象にしたイベントを行っていることが分かった。しかし、神吉山に来る子供が少ないなど、神吉地区住民の神吉山への関心が低いことが分かった。

2節での事例と聞き取り調査から神吉町内会との共通点も浮かび上がった。それは里山がかつて日常的に利用されていたが次第に放置されるようになり荒れ果てていたこと、次に空き家や遊休農地が増えたこと、事例と同様に地元で工業高校があることである。これらの条件を鍵として、里山を生かした上で独居老人、空き家問題を解決する方法を考えてきた。そこで神吉地区内に空き家が多いことや独居老人が少ないこと、里山に関心のある子どもが少ないこと、幅広い世代間の交流が必要であることなどの課題に対し、神吉町内会の象徴である「神吉山」を活かした課題解決案を考えた。

それは神吉町内会が開催しているウォーキングイベントに、子ども向けのイベントを加えるというものである。具体的には、このイベントに子ども達が拾ってきたドングリを工作したりオシャレにラッピングしたりする事を考えた。ラッピングの作業は高齢者に手伝ってもらい、作業する場所として、神吉山の近くに空き家があるならばそこを活用する。また、イベントの際に用意するおにぎりなどの軽食を作る食堂としても空き家を活用する案も考えた。可能であればこれらの案における空き家の所有権は町内会のものとする。町内会長によるとこれについては法人化がある程度進んでいるため、難しい問題ではないとのことである。また、使用に際して必要な経費は、兵庫県の空き家活用支援事業を活用したい。

若者の活躍という点では、ふれあい里山会は広報誌を発行していないということなので、広報誌やパンフレットを東播工業高校の生徒たちに作成してもらうことで、東播工業高校の生徒たちへの教育的効果となることを期待する。そして、空き家を活用する際は、東播工業高校の建築科や土木科に協力してもらい、改装することも提案したい。

以上のように神吉町内会の象徴である神吉山を活かした取り組みを行っていくことで、町内会の課題である空き家や独居老人の問題の解決へとつなげていきたい。

今回の調査では神吉地区住民への聞き取りは行っておらず、住民自身が神吉町内会やふれあい里山会に対してどのような意見を抱いているのかは具体的にはあまり分かっていない。今後、神吉町内会の住民の意見を聞くことで、住民の神吉山の保全への関心が高まることが、神吉町内会やふれあい里山会がよりよい組織となり、神吉地区のさらなる発展に

繋がるだろう。

参考文献・ウェブサイト

神吉町内会編集発行(2011)『かんきの要覧』

神吉町内会編集発行(2016)『平成 28 年度総会議案書』

澤島拓夫・畑田彩・水野昌博 (2005)「里山地域における住民参加型博物館の生態学分野における役割と課題—等身大の科学を目指した博物館活動—」日本生態学会誌 55, pp.456-465,

総務省ホームページ「空き家の適正管理に関する調査（地域計画調査） 結果報告書」（2016 年 11 月 11 日閲覧）

http://www.soumu.go.jp/main_content/000334283.pdf

総務省ホームページ「高齢者の社会的孤立の防止対策等に関する行政評価・監視 結果報告書」（2016 年 11 月 11 日閲覧）

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/000072551.html

総務省ホームページ「市町村の活性化新規施策 100 事例（平成 22 年度地域政策の動向）」pp.95-96（2016 年 10 月 10 日閲覧）

http://www.soumu.go.jp/main_content/000089133.pdf

文部科学省ホームページ「現行学習指導要領・生きる力」（2016 年 11 月 11 日閲覧）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1356250_1.pdf

朝日新聞社 2013 年 10 月 30 日記事「児童とお年寄り、競技でふれあい 南あわじ兵庫県」（2016 年 10 月 5 日閲覧）

<http://database.asahi.com/library2/topic/t-detail.php>

朝日新聞社 2015 年 9 月 28 日記事「どうする？自治会・町内会：2 老いる組織」（2016 年 10 月 5 日閲覧）

<http://database.asahi.com/library2/topic/t-detail.php>

日本経済新聞社 2016 年 9 月 3 日記事「空き部屋解放、地域にお茶の間、高齢者わいわい」（2016 年 10 月 5 日閲覧）

<http://style.nikkei.com/article/DGXMZO07072190Z00C16A9NZBP00?channel=DF130120166126&style=1>

中日新聞社 2012 年 5 月 14 日記事「建築専攻生かし里山保全 滋賀・彦根工業高」（2016 年 10 月 10 日閲覧）

<http://edu.chunichi.co.jp/weekly/?p=1398>

加古川市ホームページ「空き家バンクについて」（2016 年 10 月 5 日閲覧）

http://www.city.kakogawa.lg.jp/soshikikarasagasu/tosi_kekaku/kenchikushidoka/gyomuannai/akiya_akichi/akiyabank280501.html

環境省ホームページ「自然環境局 里地里山の保全・活用」(2016年11月11日閲覧)

<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>

きほくふるさと体験塾ホームページ「紀北町ってこんな町」(2016年11月11日閲覧)

<http://www.kihoku-kanko.com/taiken/kihokucho.html>

すごいすとホームページ「すごいすと取材記・大藤山ボランティアグループ会長」(2016年11月11日閲覧)

<http://www.hyogo-intercampus.ne.jp/sugoiist/mimurakatsura>

全国空き家ネットホームページ「空き家バンクについて」(2016年10月26日閲覧)

<http://akiya.org/akiyabank/>

東海農政局ホームページ「食と地域の交流促進対策交付金・平成23年度優良事例」(2016年11月11日閲覧)

<http://www.maff.go.jp/tokai/noson/keikaku/kasseika/koryu/index.html>

兵庫県ホームページ「県民緑税」(2016年11月6日閲覧)

https://web.pref.hyogo.lg.jp/pa04/pa04_000000001.html

兵庫県ホームページ「地域再生大作戦の展開」(2017年1月18日閲覧)

https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk08/ac23_000000005.html

三重まると自然体験ホームページ「きほくふるさと体験塾」(2016年11月13日閲覧)

<http://www.taiken.pref.mie.lg.jp/2016/06/11/1475/>

Ⅲ 神吉山を利用したスポーツイベント

スポーツ班

景山日南子・川上 司・神農拓真

1. はじめに

高度経済成長以降、化学肥料や化石燃料の普及に伴い、昔ながらの里山利用が行われなくなった。放置されることで里山が荒廃し、生態系のバランスが崩れたとされる(柿澤 2009)。放置された里山というのは往々にして藪となり、人々が侵入できない環境となる。その里山が活用され、人が集まり、評価されれば、地域にとっての広告塔になり、その地域に住む人にとって誇れるものになるのではないだろうか。しかし、里山を保全していくには、人の手による森林保全活動が不可欠なのである。

矢嶋ゼミでは、2016年9月14～16日にかけて、加古川市東神吉町神吉において、里山である神吉山の保全について聞き取り調査を行った。ここでは里山である神吉山という資源を利用し、神吉町内会が神吉山ウォーキングを行っており、加古川市の複合健康文化施設である加古川ウェルネスパークも、2016年春から神吉山を利用したハイキングを行った。スポーツ班では、これらのイベントを通じて、神吉地区住民が神吉山により一層親しみ、どうしたら誇れるものになるのかについて検討し、神吉の人たちによって、将来的に神吉地区住民の保全活動が継続していくことにつなげる。

以上を明らかにするために、2節では、親子が参加するウォーキングイベントと、市民と行政による里山保全の例について紹介する。3節では、神吉山を利用したスポーツイベントの取り組みについて述べる。以上をふまえ、4節では、神吉山に神吉地区住民がいかに親しみ誇れるものにするかについて検討し、神吉山の保全活動が神吉町内会の人々によって継続して行く方法を考える。

2. 親子が参加するウォーキングイベントと市民と行政による里山保全の例

最初に紹介する事例は、福岡市の西新商店街で行われている「海平さんからの挑戦～西新商店街×サザエさん通り 謎解きウォーク～」である。西新商店街連合会公式ホームページによれば、これは、人気テレビマンガ「サザエさん」に関するクイズを解きつつ、2時間ほどのウォークラリーをするというものである。8つのチェックポイントにおいて暗号を集めると最後の謎が完成し、それに対する答えを手に入れると、ゴールできるというものである。小学校低学年の児童でも、親子で力を合わせればクリアできるようにできており、全ての答えが支給されるアイテムに隠されているとのことである。パートナーや友人、親子で楽しく参加できるイベントとなっている。参加記念品としてサザエさんバッジも配られており、子どもにとって楽しいイベントである。

次の事例は、奥（2010）による、ナラ枯れや獣害が起きている里山に対する保全についての研究である。ここでは、里山保全に関する新たな観点での試みが記されていて、一つの機能にだけ焦点を当てて解決法を探るのではなく、複合的に解決策を探るものである。その中の重要な要素として、市民活動と行政の関係のあり方について論じられている。それは、「協働」しながら市民と行政がお互いの足りない部分を補完し、里山を保全管理するという内容である。

その背景として、里山が市場から離れ、行政というセクターでも対応できなくなったために、保全管理が共・私セクターによって担われてきたという事実がある。共セクターとは、行政機関の管轄する区域、私セクターとは、市民・住民の管轄する区域のことである。しかし、共・私のセクターでの失敗というものは起こり得るし、ナラ枯れの拡大に対しては無力な状態が続いている。不確定な要素が増え続ける現代の里山においては、専門性を媒介できる行政機関と、地域の里山にじっくりと向き合うことのできる市民による、本当の意味での「協働」が求められているとされる。

3. 神吉山を利用したスポーツイベントの取り組み

(1) 神吉町内会主催の神吉山ウォーキングとふれあい里山会の取り組み

神吉山は神吉町内会が所有している里山である。写真1は、矢嶋ゼミが神吉山ふもとで行った、焼いた炭を使った工芸体験企画の様子である。

神吉町内会の一組織であるふれあい里山会への聞き取りによれば、この神吉山で神吉町内会がウォーキングイベントを行っている。神吉山には何本かの登山道があり、それらの整備はふれあい里山会が行っている。神吉町内会では8月の第一日曜日を草刈の日とし、分担して草刈りを行っている。年に一度では足りないため、6月

と11月に追加でふれあい里山会が所有する二台の草刈り機を用い、追加で草刈りを行っているとのことである。なお、ふれあい里山会の小山さんによると、登山道にある、石を切削して作られた階段や、擬木の階段は、兵庫県「里山・ふれあいの森づくり」事業の一環として、加古川市により整備されたとのことである。多様な道・路の変化に対応して作られており、急こう配な場所には、手すりによる安全確保が施されている。

毎年12月に行われている神吉山ウォーキングは町内会が主催し、毎回200～230人が参加しているとのことである。里山会はウォーキングにおいて、マラソンに例えるとコース係のような役割を担っている。ウォーキングの参加者は回覧板で募集しており、神吉町内会外の方でも、当日の飛び入り参加が認められている。なお当日は、おにぎりや汁物が提供される他、子ども向けのビンゴ大会等も行われているという。



写真1 焼いた炭を使ったふれあい里山会による工芸体験企画の準備風景
2016年9月14日 神農撮影

(2) ハイキングイベントを行う加古川ウェルネスパークについて

加古川ウェルネスパークは、加古川市東神吉町天下原に位置する、加古川市の複合健康文化施設である。2016年9月14日に、矢嶋ゼミが館長の緒方氏の案内で見学したところによると、施設内の設備として、写真2のアラベスクホールと呼ばれる音楽ホール、加古川市立図書館、公園、セミナールーム、プール、ジムなどがある。料理やスポーツなどの教室も開かれており、住民の憩いの場所となっている。加古川市役所から委託された神鋼不動産による指定管理者制度によって管理されているとのことである。

加古川ウェルネスパーク職員の荒内さんからの聞き取りによると、加古川ウェルネスパークをさらに居心地のいい場所にするために、何ができるのか模索しているそうである。加古川ウェルネスパークが開館する前に、毎朝ラジオ体操を行っていて健康を促進している。これは、主にジム利用者をターゲットとしていて、30~40人ほどの人がラジオ体操に参加しているのが見受けられた。写真2の芝生では、普段年配の方のゲートボールや家族連れのピクニックに使用されている。また、この芝生はグランドゴルフにも使用することができる。申し込みをすれば加古川ウェルネスパークが主催するグランドゴルフ大会に参加でき、毎回120人ほどが参加している。大会の景品は、加古川ウェルネスパーク内のアラベスクホールで行われるコンサートのチケット

などである。ジムには長年同じ器具しかなかったため、最近新しい器具を取り入れ、ジム離れを防ぐ努力を継続しているとのことである。

また加古川市立図書館での読み聞かせや、小学校に出向いてお話会を行うなど、小さい子どもを対象としたイベントも開催されている。マスコットキャラクターのウェルピーは、子どもからの人気非常高く、イベント時には市から着ぐるみを貸し出してもらおうとのことである。

日頃から、加古川ウェルネスパークへの来訪者が多いため、新たなスポーツイベントを企画することや、趣向を変えたイベントを行うことで、新規の参加者が見込めることが期待で



写真2 加古川ウェルネスパーク屋外の芝生
2016年9月14日 景山撮影

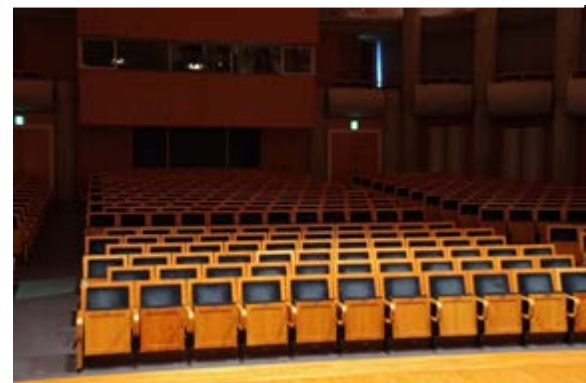


写真3 アラベスクホール客席
2016年9月14日 神農撮影

きる。

そこで取り上げるのは、この加古川ウェルネスパークが初めて実施した、神吉山ハイキングである。このハイキングイベントは、神吉山の良さを生かしたいと始まった。第1回が2016年4月で、春に実施したのは桜がきれいで、新緑の季節だからだという理由である。60歳代以上の参加割合が高く、参加者は神吉地区以外の人々で、20人であった。高齢者ばかりであるので、イベントの途中で休憩をこまめにはさんだとのことである。参加費は100円で保険料として使われており、新たに子ども用の景品を用意するのは難しいとのことであった。

ふれあい里山会に協力してもらって作成したパンフレットを用いて案内をしたが、歴史についての説明が不十分であったと感じているとのことである。また、ふれあい里山会が、イベント直前に草刈りをしてきていたとのことである。

4. おわりに

本研究では、加古川市東神吉町神吉の地区住民による、神吉山の将来的な保全活動の継続を目標に、神吉地区住民が神吉山を親しみ誇れるものにしていくために、親子が参加するウォーキングイベントと、市民と行政による里山保全の例について紹介したうえで、神吉山における二つのウォーキングイベントの現状について明らかにしてきた。

福岡市西新商店街の事例からで参考にとできるところは、子どもでも楽しく行える、クイズ形式のスタンプラリーであるということである。また、子どもでも回答できる難易度のクイズであることから、親子でも気軽に参加できるイベントであるということである。

神吉町内会による神吉山ウォーキングでは、200人もの地区住民が神吉山に登り、また食事や、子ども向けのイベントなどの工夫に取り組んでいる。しかし、今ふれあい里山会を構成している年齢層から、今後十数年先を見据えた時に、イベント開催が続けられなくなる可能性が指摘できる。次の世代に里山保全活動を引き継ぐ人材がないという点が課題である。

そこでこの神吉山ウォーキングをより良いものにし、神吉山を保全して行くための提案をする。すでにビンゴ大会も行われているが、子どもに神吉山についての知識をもたらし、記憶に残してもらうためにも、神吉山にある生き物や歴史、神吉山から見える風景に関するクイズを出題するクイズラリーを、神吉山ウォーキングに組み込むことを提案する。これによって、子どもの参加者数がより一層増え、同行する親が増えることで親世代が里山に興味を持ち、町内会としての神吉山保全活動へのコンセンサスに加わり、あるいはふれあい里山会の一員に加わることにより、神吉山の保全活動に繋がる。そして、その親世代に里山に興味を持ってもらえれば、里山の保全活動につながる。

一方、加古川ウェルネスパークによるハイキングは、少人数ながら神吉地区以外の参加者からなっているために、神吉山を神吉地区以外の人に広めていく役割も果たしていると言える。しかし、今後も継続してハイキングイベントを続けていくにあたって、リピーターや

新規の登山者に来てもらうための工夫が必要だろう。そのために、ハイキングイベントでは、神吉山についてテーマを毎年変えて、知識を提供するなどの工夫が挙げられる。

また、第 2 回のイベント時には、ふれあい里山会と日程の調整が行われていなかったようであった。ふれあい里山会と加古川ウェルネスパークの協力体制には改善点があるように感じた。

そこで、奥 (2010) が言った、行政 (またはそれに準ずる機関) と市民によって助け合い、お互い足りない部分を補うことが、今の時代に合った里山保全の形であるという点を活用し神吉町内会と加古川ウェルネスパークが、お互いに知識を深めるような連携の在り方を提案したい。具体的には、本気で里山を残していきたいという神吉町内会の人々と、加古川ウェルネスパークの職員が集まり神吉山の知識を深めることや、保全の在り方について考えるワークショップを行うというものである。これにより、奥 (2010) が述べているように複合的視点から、里山保全の検討をできるようになることに繋がる x。

また、加古川ウェルネスパークによるハイキングが、神吉地区以外の人々が参加するイベントとして、続くことで神吉山の存在が、加古川市や東播磨地域の人々に、広く知れ渡るための広告塔の役割を担うことが期待できる。何より、神吉地区外の人々がわざわざやってくるハイキングが、神吉山で行われているという事実自体が、神吉町内会の様々な年齢の住民にとって自慢となるだろう。

このように、神吉町内会の住民と加古川ウェルネスパークが協力していくことが、神吉山のよりよい保全につながる。そのためにも、お互いに協力することが大切である。その過程で、神吉町内会の神吉山ウォーキングと、加古川ウェルネスパークのハイキングイベントは、より良いものになっていくのではないだろうか。そのためにも、ふれあい里山会の存続が不可欠である。

参考文献

奥敬一 (2010) 「現代の里山をめぐる背景の変化」ランドスケープ研究、67 (2)、pp.82-85

柿澤宏昭 (2009) 「よくわかる環境社会学」鳥越皓之・帯谷博明編著『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房、pp.46-47

西新商店街連合会公式ホームページ <http://nishijin.fukuoka.jp/news/3508/>

加古川ウェルネスパーク公式ホームページ <http://strkstrss.jp/wellnesspark/>

兵庫県加古川市観光協会ホームページ <http://japankankou.jp/hyogo/079-424-2170.html>

IV 神吉山の生き物や自然環境を活用したPR

生物班

谷川夏鈴・長谷律樹・渡部佑輔

1. はじめに

里山は、様々な生き物や自然環境が多く生息する場所であり、日本の原風景の一つである。現代においては都市開発が進む一方で、里山保全を行う活動も全国各地で行われている。兵庫県内で活動を行っている事例のうち、加古川市東神吉町神吉にある神吉山では、町内会の組織である「ふれあい里山会」が、神吉町内会の象徴である神吉山の手入れをボランティアで行っている。神吉山は、北山・中山・行者山・小山（前山）を総称して神吉山という。この里山は、昔から地域住民が石切り場や薪炭の採取などを行ってきた、この地域にとって必要不可欠な存在であった。

矢嶋ゼミでは、2016年9月14日から16日まで神吉山の保全について聞き取り調査を行い、調査の中で神吉山には様々な生き物や自然環境が多く生息していることが明らかになった。神吉山ウォーキングで身近な生態系に触れることが出来るものの、その他に外部発信の手段が少ないということが問題となった。

生物班では、ふれあい里山会のメンバーである小山重示さんらに聞き取り調査を行い、その結果や現地調査をもとに過去と現在の生き物や自然環境について明らかにし、今後里山である神吉山が活性化し、地域住民がより親しみを持って里山に触れることが出来るような提案を行っていく。

研究は以下の通りを進める。2節では子どもを対象にした里山の活用事例を紹介する。3節では、ふれあい里山会のメンバーに行った聞き取り調査をもとに、神吉山と周辺の生き物や自然環境、ふれあい里山会による神吉山の保全活動について明らかにする。4節では、ふれあい里山会の現状から見えた今後の課題について、子どもを対象にした里山の活用事例を参考にして課題の解決策を考える。

2. 子どもを対象にした里山の活用を行っている事例

里山を活用している事例として次のようなものがある。森の学校のホームページによると、群馬県では、1993年にNPO法人「森の学校」が設立され、子ども向けのキャンプや棚田を利用した米作りを行い、地域間の交流や活性化を行っている。森の学校では、フェイスブックなどを活用し外部に情報発信を行っており、活動の様子や動植物の写真を掲載している。

千葉県市川市のホームページによると、小学生の自由研究や家族連れを狙いとしたイベントとして、地区の野生動物や植物の話を森林インストラクターから学ぶ講座や写真パネ

ル展を開いている。自然と触れ合うことが出来る施設の紹介や生物多様性に関するモニタリング調査などを行い、市民が生き物と身近に触れ合える政策を実施している。

このように、全国各地でそれぞれの地域の個性を活かした里山の活性化による町おこしを行っている。また、SNS などを活用した情報発信や動植物に関する講演会など、地域住民が気軽に足を運ぶことが出来るような活動を行っている事例もある。こうした NPO 法人の設立や講演会などによる情報発信といった子どもを対象とした取り組みには、神吉山を活性化するために活用できるところがあるのではないかな。

3. 神吉山と周辺の用水路の生き物と自然環境

(1) 神吉山の保全活動と周辺の用水路の様子

小山さんによると、神吉山は、昔は村全体で薪炭・肥料の活用を行う入会地であった。また、竜山石が多く取れたため、石切り場として神吉地区の住民が利用していたとのことである(写真 1)。1877 年に、神吉山が官有地となり、払い下げられた。しかし住民が活用していたことから、寄付を募って 1887 年に買い戻しを行った。中山の山頂には、この出来事を後世に残すために記念碑が建てられている。



写真 1 神吉山の石切り場の跡

2016 年 9 月 14 日 谷川撮影

神吉山は、神吉町内会内の一組織であるふれあい里山会が手入れや植樹活動などを行っている。ふれあい里山会は神吉山の麓を活動拠点としており、月に 1 回の里山会の作業日にウォーキングコースで使われる遊歩道の整備や下草刈り、小学生による植樹活動などを行っている。また、年に 1 回、町内会全体で神吉山の清掃を行っているとのことである。小学生による植樹活動は、文部科学省が 1983 年に各都道府県教育委員会へ通達した「緑化運動の推進について」の別紙「緑化運動の推進要領」によるものであるという。しかし、実際は小学生が植樹活動を行った後に再び里山の様子を見に来る子どもたちは少ないとのことである。

兵庫県では、独自に徴収している県民緑税により、災害に強い森づくりや針葉樹林と広葉樹林の混交林整備を進めているが、神吉山での活動もこの県民緑税によるものである。約 350 万円の予算で小屋の整備などを行い、その後町内会としてボランティア活動を行っている。

加古川市が 2000 年 3 月に策定し、2015 年 1 月に改定した「加古川市緑の基本計画」では、ウェルネスパーク・平荘湖周辺の里山が重要な保全地域として掲げられ、神吉山もその範囲に含まれている。一方で、加古川市のハザードマップによると、神吉山周辺は山腹崩壊

危険区域や土砂災害警戒区域の一部に指定されており、神吉町内会やふれあい里山会のメンバーは、ハザードマップへの指定を把握していなかったとのことである。また、それに伴う防災林の整備も行っていないとのことであった。

神吉山の麓にある神吉墓地やその周辺では、農業用水路が複雑に入り組んでいる。町内会の用水路担当者が年に2~3回手入れを行っているとのことであるが、水生生物にとって住みにくい環境であるコンクリート三面張りであるため、整備されているため、少なくともフィールドワークを行っている最中に生き物は見られなかった。

また、神吉山ではミツバチを養蜂しており、ハチミツの採取や生態の観察などを行っている。このハチミツは販売されておらず、神吉山ウォーキングでの配布や個人で使用するのみにとどまっている。その理由は、採れる量があまり多くないため、販売することを目的としているのではなく、あくまでふれあい里山会で使用するとのことである。

(2) 神吉山や周辺の用水路の生態系

ふれあい里山会のメンバーによると、神吉山ではメジロやウグイスなどが確認されており、フィールドワークを行った時にはヒラタクワガタといった昆虫の存在も目にした。

かつて生息していた生物について、里山周辺の環境がここ何十年かの際に大きく変わったため、里山周辺の生物も大きく変わった。例えば、ツバメは最近の家屋の形状などの変化により巣を作る場所がなくなり生息数も激減した。タヌキも多く見られていたようだが、一時期数が増加した野良犬の発生により、タヌキが怯えて出てこなくなったという。



写真2 休耕している田んぼ

2016年9月14日渡部撮影

生活排水を原因とする水質悪化、用水路のコンクリート化や放棄田の増加による環境の変化により、ホタルやドジョウは住む場所を失ってしまったとのことである(写真2)。

最近になって増えてきた生物として、挙げた名前ほとんどが、アライグマやジャンボタニシなどの外来種であり、それらによる里山周辺の被害も確認されているとのことである。代表的な例としてふれあい里山会のメンバーの話で挙げたのが、アライグマである。作物の収穫期を狙って農村地域まで下りてきて畑を荒らすという被害があった。対策として加古川市が捕獲器の貸し出しを行っているが、アライグマを捕獲できた例はなく、抜本的な対策となっていないのが現状である。

周辺地域でも、主にブドウ、スイカ、トウモロコシに被害が集中しているほか、空き家に営巣している為、糞害を発生させているという。

水辺で増加したのはジャンボタニシであり、近年幼苗を食べることで甚大な被害を与えている生物である。フィールドワークを行っている最中に田んぼで育っている稲の中に食い荒らされた跡がはっきり残っており、用水路にピンク色の卵が無数に産みつけられているのも確認した。奈良県のホームページ「ジャンボタニシ」によると、ジャンボタニシの正式名称は「スクミリンゴガイ」であり、1981年に食用として輸入されたものの在来のタニシよりも味が劣ることから、放置され野生化したものが西日本各地に広がったとされている。農林水産省の有害動物にも指定されており、早急な対策が必要であるとされている。ジャンボタニシは、稲がある程度大きくなると周りの雑草を食べるため、その特性を活かして除草を行う農法もあるが、ジャンボタニシによる農法は受け入れられないという農家が多いことが現状という。

4. おわりに

本研究では、過去と現在の生き物や自然環境について分析を行い、今後神吉山が活性化していくために必要な生き物や自然環境、ふれあい里山会の活動の現状を明らかにしてきた。

今回の調査では神吉山に様々な生き物が生息しているが、発信の手段が少なく、多くの地域住民が神吉山に触れ合うきっかけが少ないことが分かっている。また、生活排水や放棄田といった生活環境の変化や外来種の増加により、住む場所を失ってしまった生き物も多い。こうした外来種への対策方法としては、捕獲器の使用に加え、中に入れるエサを工夫し、出没しやすい場所、巣を作っている場所をある程度特定して、その周辺に罠を設置するなどして対策を行っていくことも考えられる。

神吉山の手入れを行うふれあい里山会では、メンバーの高齢化が進み次世代の担い手が最大の課題となっている。しかし、次世代の担い手である若者が里山への関心が薄いことが現状である。若者を里山に取り込むためにも、神吉町内会の象徴である神吉山の魅力を理解してもらうことは必要不可欠である。

神吉山の特徴や他地域の事例を踏まえ、SNSや観察会といった気軽に参加できる行事の中で、地域の特徴や生物を活かしたPRを行うことが効果的ではないかと思われる。2節で挙げた千葉県市川市の事例では、小学生の自由研究や家族連れを狙いとした写真パネルの展示や生き物の観察会を積極的に行っていた。また、群馬県で行われているNPO法人「森の学校」では、子どもを対象にした野生動物の観察会など、子どもが関心を持てるような取り組みを行っていた。そこで、神吉山に生息する動植物の写真パネル・実物の展示を行い、小学生の自由研究や家族連れを狙いとした展示会を開くのはどうだろう



図1 ミツバチの「カンキチ」
作：矢嶋ゼミ谷川夏鈴

か。

また、神吉山には、ミツバチやヒラタクワガタなど子どもが関心を持てるような生き物がいることから、ふれあい里山会が神吉山の魅力などについて PR を行い、神吉山やふれあい里山会を PR するチラシや、可能であればふれあい里山会が採取したハチミツなどを参加者に配布するなど、ふれあい里山会が中心となって身近な生態系に触れるきっかけをつくることは、実現性があるのではないかと考える。

さらに、神吉山で養蜂されているミツバチをモチーフにした、マスコットキャラクターである「カンキチ」を提案する（図 1）。このキャラクターをパンフレットなどに掲載することで、より里山が身近に感じられ、子どもや、子どもの親世代の年齢層も取り込むことが可能になるのではないかと考える。

聞き取り調査を通して、神吉山には多様な生き物や自然環境が魅力として存在しているため、町内会やふれあい里山会が積極的に里山の PR を行えば、若い世代を取り込むことは十分可能であるといえる。

今回の研究では、里山周辺の環境についての詳細な聞き取り調査が不十分であった。そのため、今後の調査ではその点について明らかにしていく必要がある。

参考文献・ウェブサイト

市川市ホームページ「市川市の自然」

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/catpage/kurashi-sizen.html>（2016年12月20日閲覧）

加古川市総合防災マップ

<http://www.city.kakogawa.lg.jp/hp/hazardmap/index.html>（2016年10月26日閲覧）

加古川市緑の基本計画

<http://www.city.kakogawa.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/20160301%201.pdf>

（2016年10月25日閲覧）

奈良県ホームページ「ジャンボタニシ」

<http://www.pref.nara.jp/20321.htm>（2016年11月8日閲覧）

兵庫県ホームページ「県民緑税」

https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk22/pa04_000000001.html（2016年11月8日閲覧）

NPO 法人「森の学校」

<http://www.morinogakkou.jp/index.html>（2016年10月26日閲覧）

V 神吉町における歴史ウォークについて

歴史班

伊藤光太郎・高瀬 登・松井 輝

1. はじめに

文部科学省ホームページ「スポーツ基本法」のページによると、1961年にスポーツ振興法が制定されてから50年以上が経ち、スポーツを行う目的が多様化してきた。スポーツ基本法の前文によれば、「スポーツは人と人との交流を活性化させることから地域社会の再生に寄与する」と言われている。

一方で、歴史ファンや歴女と呼ばれる人々を対象とする様々な歴史イベントが全国各地で盛り上がりを見せている。例えば、奈良県観光局ならの観光力向上課では、「歩いて見つける奈良の楽しさ」と銘打ってウォーキングマップなどをホームページで紹介している。また、大阪府堺市では、2013年11月より、国土交通省近畿地方整備局により阪南大学国際観光光学部の企画ツアーとして「堺こんぶウォーク」が行われ、多数の参加者があった。はなやか関西公式ホームページによると、堺市は、中世に貿易港として繁栄し、戦国時代には自治都市として独自の発展を成し遂げ、各地に史跡が存在する他、大正末期から昭和初期の最盛期には、150以上の昆布加工業者が軒を連ねていた。このことから、食文化と歴史を活かしたウォークイベントが行われた。以上から考えると、歴史とウォークを結び付けたイベントのニーズがあるといえる。

矢嶋ゼミでは、2016年9月14日～16日の3日間にかけて、加古川市東神吉町神吉において里山である神吉山の保全についての聞き取り調査を行った。神吉山は北山・中山・行者山・小山（前山）の総称である。調査対象とした神吉地区には、城跡や石仏など歴史に関係する数多くの遺産がある。神吉山は史跡や豊かな自然もあり、標高は低いが、ウォーキングに適している。神吉町内会が神吉山ウォーキングを年に1回行っている。しかし、神吉山の保全活動を行っているふれあい里山会は、シニアのメンバーが中心で若者が不足していることが課題である。

そこで、歴史班では、神吉地区や神吉山の歴史遺産の存在と大切さを地域住民に知ってもらい、将来に渡って残していくことを目標として、世代交代をしていく必要がある。そのために、神吉町内会が行っている神吉山ウォーキングに歴史遺産を活用し、子どもたちに興味を持ってもらい、親と一緒に来てもらうことで、親が里山会の活動に意義を感じてメンバーとして加わるきっかけを作るのも一つの方法ではないだろうか。その際、地域の歴史を十分に活かしつつ、できるだけコストをかけず長く歴史ウォークを続けられるように提案し、なおかつ、子ども達が参加しやすくなる方法を考えたい。

研究は以下の通りに進める。2節では、歴史ウォークの成功例と歴史のマスコットキャラ

を活用している例を紹介する。3節では、神吉地区で行った聞き取り調査と神吉山における現地調査に基づき、神吉地区や神吉山の史跡について詳しく紹介する。以上のことをふまえ、4節では、神吉地区と神吉山の史跡を活かした歴史ウォークやキャラクターについての提案をする。

2. 歴史を活かしたウォークとマスコットキャラ

歴史ウォークの成功例と思われるものに、広島県福山市において備陽史探訪の会が行っている「親と子の歴史ウォーク」がある。同会のホームページによると、毎年5月5日に行われる「親と子の歴史ウォーク」は、同会最大のイベントである。2016年に34回目を迎え、定員100名で、参加費は大人300円、高校生以下100円である。第34回では「山手銀山城跡」を歩いて見学したとのことである。第1回から第29回までは「親と子の古墳めぐり」として主に福山市内の古墳を中心とした遺跡を見学してきたが、第30回からは古墳にとらわれず様々な時代の遺跡を取り上げていこうと、名称を変更したという。また、クイズ大会やペットボトルを使ったほら貝作りといった子ども向けのイベントも行われている。この「親と子の歴史ウォーク」は毎年60人以上の親子が参加している。「親と子」という言葉を大きく入れることで家族連れの参加者も増加するのではないかと考える。

歴史のマスコットキャラクターを活用している例として、滋賀県彦根市の「ひこにゃん」というマスコットキャラクターの成功が挙げられる。「ひこにゃん」とは、2007年の彦根城築城400年祭のPRキャラクターである。公式ホームページによると彦根藩2代当主である井伊直孝公をお寺の門前で手招きして雷雨から救ったと伝えられる招き猫と、井伊軍団のシンボルとも言える赤備えの兜を合体させて生まれたキャラクターである。同年に行われた「国宝・彦根城築城400年祭」のイメージキャラクターとして登場し、イベント終了後も引き続き役割を担うこととなり、彦根城域ではほぼ毎日登場している。

また、静岡県浜松市では「出世大家康くん」というゆるキャラがある。公式ホームページによると出世大家康くんは「ゆるキャラグランプリ2015」でグランプリに選ばれた。出世大家康君は、浜松の地に「浜松城（出世城）」を築き、17年間城主を務めたのち天下統一を成し遂げ、その生まれ変わりと設定されており、出世大名という異名を持っているとのことである。週に一度、浜松城を散策している。

以上のように、「親と子の歴史ウォーク」からは、ウォークイベントのなかに子ども向けのイベントを組み入れたり、イベントのタイトルに「親と子」の言葉を入れることで家族連れが多く参加している。また、彦根市には「ひこにゃん」、浜松市では「出世大家康くん」からは歴史のマスコットキャラが有効であることがわかった。そこで、神吉山ウォーキングに「親と子の歴史ウォーク」のようなイベントを組み入れたり、「ひこにゃん」のようなマスコットキャラクターを作ることで、子ども達のイメージを変えていくことができないかと考える。

3. 歴史ウォークに活かすことができる神吉地区と神吉山の歴史的史跡

(1) 神吉町で歴史ウォークを行うには

東神吉町在住であり、神吉地区の歴史に詳しく、播磨奇人伝を読む会会員で、学芸員でもある久保一人さんに聞き取りを行った。それによると、加古川市では、豊かな自然、歴史と文化が調和する播磨路を舞台とし、ウェルネス都市加古川の魅力を体感できるウォーキングイベントである加古川ツーデーマーチを行っているが、毎年ルートが同じで参加者が年々減っているとされる。兵庫県も加古川市も財政難であり費用をかけることが出来ないのが現状であるとされる。

神吉山ウォーキングについても、地域外から人を呼び込むには相当な仕掛けが必要ではないかと言う。また、一度きりで終わらずに継続できるかどうか難しい問題である。わざわざ出向いてきてもらえる魅力づくりは、神吉地区の住民自身が地域をよく知ることからスタートするべきだとしている。PRの方法も、兵庫県や加古川市が財政難とされることから、できるだけお金のかからない方法が良いとのことで、インターネットなどを用いて若者にPRできる方法がいいのではないかとのことである。

また、兵庫県や加古川市といった自治体と連携して歴史ウォークを行うのであれば、地域の魅力を知り、主催者も参加する人も楽しいことは何なのかを知ることが必要であると言う。そのためには、人を惹きつける提案を出し、加古川市と相談するなどといったように地道な取り組みからスタートすればよいのではないかとのことである。そこで、以下においては、神吉地区や神吉山で歴史ウォークに活用したい材料について紹介する。

(2) 神吉城と神吉山について

神吉町には、常楽寺という神吉城跡に建つ寺がある。神吉城は1469（文明元）年に築かれ、1578（天正6）年に織田信長の長男である信忠の率いる軍勢が別所長治の三木城を攻めた際、密接な関係にあった神吉民部太輔頼定の神吉城も攻撃され、落城したのである。

太田（1997）によると、「北から東にかけての山には中将信忠卿・神戸三七信孝・林佐渡守・永岡（藤孝）・佐久間らの諸将が前後左右幾重にもびっしりと陣をしき、志方の城へは北畠信雄卿が陣を構えた」と述べている。久保さんによれば、はっきりとは分からないが、この山のどこかが神吉山と思われる。神吉城攻めの際に攻撃のようすがよく見える重要な場所であったため、織田信忠らが本陣を置いていた可能性がある。

神吉城があった当時、つまり落城する以前の周辺の村に関する記録は残っておらず、想像するしかないとのことである。当時は茅葺屋根の家が建ち並び、川から水を引いた堀には船が繋いであるというようなイメージではないかと久保さんは話していた。

また、久保さんによれば、江戸時代の頃に常楽寺に巡礼した人がいたかの記録は寺に残っていないので分からないものの、江戸時代は今より寺への信仰心が篤く、寺を巡ることは娯楽でもあったため、当然巡礼した人は多かったと思われるとのことである。

(3) 西国播磨三十三カ所観音像について

中山には、西国播磨三十三カ所観音像が並んでいる。その中の18番目には、常楽寺の文字が刻まれている(写真1)。『かんきの要覧』によると、「神吉城主神吉重員^{しげきだ}(初代城主元盛の先祖)が山名宗全との合戦で討ち死にしたので、重員の子彦次郎治邦が城主になった時、神吉一族のため、中山の中腹に西国三十三所観世音を建立して冥福を祈願したが、天正六年神吉城が落城の後補修する者が無かったので散逸してしまった。昭和六年満州事変に殉死した兵士を思い、日清・日露の役に沈没した英霊を祭る記念碑を訪れる人が少なくなる事を思い、昔の仏跡を再建して国家の隆盛武運長久を祈り合わせて、死の英霊の碑前に参拝者が多からんことを願い、有志と相談して西国三十三霊所を再建し、昭和八年四月二十九日開眼供養した」と記されており、元々の歴史は古いものの、現在見られる観音像は再建されたものと見られる。里山会のメンバーの話によると、神吉山は岩山で、石切り場跡があることから、神吉山の岩で石像が造られたようである。

久保さんによれば、西国播磨三十三カ所は、播磨国にある観音霊場である。西国観音霊場に倣い、江戸時代初期に、姫路市にある慶雲寺の南室和尚(大悲弘濟禪師)(1591~1671)により選定され、南室の死後、入寂地である天徳山常光寺を客番として加え34か所となった。播磨西国三十三カ所には、モデルとなった西国三十三カ所観音霊場のうち圓教寺、清水寺、一条寺が含まれる。

(4) 日露戦役記念碑について

北山の頂上には、日露戦没記念碑があり、東神吉村10名と西神吉村13名、あわせて戦没者23名の名が刻まれている日露戦役記念碑がある(写真2)。西南戦争での4名の戦死者、日清戦争での6名の戦死者、日中戦争での2名の戦死者の名前も刻まれている。

なお、日露戦争に従軍した久保さんの祖父の名前も刻まれている。しかし、久保さんの祖父は戦死したわけではないことから、建設協力者も記名しているのではないかと久保さんは考えている。



写真1 中山にある西国三十三霊所観世音の18番目

2016年9月15日松井撮影



写真2 北山にある日露戦役記念碑

2016年9月15日松井撮影



写真3 行者山にある行者菩薩。右から不動明王、役行者、蔵王権現

(5) 行者菩薩について

行者山の頂上には、行者菩薩の石像があり、右から不動明王、役行者、蔵王権現が立ち並んでいる（写真3）。『かんきの要覧』によると、「行者山の名前は古くて其の年代は不明である。しかし平成二十二年より三百十二年前（元禄十二年）役の行者の壱千年忌大供養が行われたと古書にある。行者山の峰に役の行者を供養して、石像を有志が建てたが、明治年間に大破して基礎石のみ残った状態であったので、神吉庄吉主催となり神吉村有志と諮り、行者菩薩及び不動明王の石像を再建し、昭和八年四月二十九日開眼供養した」と記されている。この行者菩薩の役行者は山へ籠って修行をする修験道の開祖とされている。

4. おわりに

本研究では、神吉地区と神吉山の歴史遺産を残していくために、ふれあい里山会を盛り上げることを目標にした。神吉山ウォーキングに歴史を活用し、子どもたちに興味を持ってもらって親子で参加してもらう方法について考えた。最終的には親世代に里山会のメンバーに加わってもらうことを狙いとしている。

2節において、広島県福山市で備陽史探訪の会が行っている「親と子の歴史ウォーク」をとりあげ、家族連れが来ていることが特徴であることを示し、クイズ大会やペットボトルを使ったほら貝作りなどのイベントなどの魅力的なイベントの存在を指摘した。

また、「ひこにゃん」や「出世大名家康くん」といったマスコットキャラクターが成功していることから、歴史のマスコットキャラを活かせることがわかった。

3節では、神吉地区にある神吉城跡や、神吉山の西国三十三ヵ所観音像、日露戦役記念碑、行者菩薩などの歴史的史跡を紹介した。これらはウォーキングイベントに有効活用が可能ではないかと考える。

では、どのようにしたら、神吉町で歴史ウォークを成功できるのか。

まず、これらの歴史的史跡を載せた神吉地区や神吉山の地図を活かしたパンフレットを作成し、地域住民や地元の小中学生に配ることで、神吉地区や神吉山の歴史について地域住民に興味を持ってもらうことができないうだろうか。その際、神吉地区にある飲食店や小売店などの広告や割引券などを付けるなどすれば、地元と一体となった活性化につなげることも可能ではないかと考えた。

ふれあい里山会が行っている神吉山ウォーキングに歴史を活用し、子どもたちに興味を持ってもらい、親と一緒に来てもらうことで、親が里山会の活動に意義を感じて、メンバーとして加わるきっかけになるのではないかと考えた。そのために、「親と子の歴史ウォーク」を参考にして様々な子ども向けのイベントを神吉山ウォーキングに取りあげていくことができるのではないかと考えた。

それに加え、家族連れの子どもをターゲットに歴史のマスクットキャラクターを提案したい。神吉山には、西国播磨三十三カ所観世像があるが、子どもを守るのは地蔵菩薩と考えられることから地蔵像を取り上げ、生物班で作成したミツバチのマスクットキャラクターの「カンキチ」をお地蔵さん風にアレンジし、「カンキチ地蔵」としてみた（図1）。里山と歴史が合わさったキャラクターとして用いることで、子どもに興味を持ってもらえるのではないかと考えた。これをパンフレットの地図に用いたり、ステッカーを制作して地域住民や地元の小中学生に配るなどして活用していくことが出来るのではないだろうか。



図1 カンキチ地蔵
作：矢嶋ゼミ谷川夏鈴

以上のことから、歴史ウォークを提案してふれあい里山会を盛り上げることを期待したい。

参考文献・ウェブサイト

太田牛一著、榊山潤訳（1997）『信長公記・下』教育社

神吉町内会編集発行（2013）『播州神吉城と神吉合戦』

神吉町内会編集発行（2011）『かんきの要覧』

歩く・なら公式ホームページサイト

<http://www3.pref.nara.jp/miryoku/aruku/>（2017年1月16日閲覧）

国土交通省近畿地方整備局 はなやか関西公式ホームページサイト

http://www.kkr.mlit.go.jp/kokudokeikaku/program/category_plan.html

（2017年1月16日閲覧）

加古川ツーデーマーチホームページ <http://kakogawa-2daymarch.jp/outline>

（2016年12月21日閲覧）

出世大名家康くん公式ホームページ <https://www.ieyasu-kun.jp/>

（2016年12月21日閲覧）

ひこにゃん公式ホームページ <http://hikone-hikonyan.jp/>（2016年12月21日閲覧）

備陽史探訪の会ホームページ「親と子の歴史ウォーク」

<http://bingo-history.net/archives/16049>（2016年12月21日閲覧）

文部科学省ホームページ「スポーツ基本法」

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/（2016年12月21日閲覧）

役行者霊蹟札所会公式ホームページサイト

<http://www.ubasoku.jp/index.htm>（2016年12月21日閲覧）

読売新聞 2006年4月19日「彦根城400年祭 キャラの愛称ひこにゃん招き猫 甲冑モチーフ」

VI 地図を用いた神吉山の広報と里山としての保全

里山広報班

大峪真里・佐伯浩平・山本侑治

1. はじめに

現代日本において、人々が地域の自然に触れ合うことのできる場は減少しているだろう。かつては自然に触れる場として里地里山があった。環境省(2012)によると、「里地里山は、集落を取り巻く二次林と人工林、農地、ため池、草原などを構成要素としており、人為による適度なかく乱によって特有の環境が形成・維持され、固有種を含む多くの野生生物を育む地域」とされているが、里山の定義は明確に定められていない。

世界文化遺産に登録されている岐阜県の白川郷や、「となりの里山」と銘打っている広島県の湯来町などでは、自然としての里地里山を有効活用し、観光資源として生かしていく動きが見られる。また、岡山県真庭市のように、里山を生活に活用している場所も存在している。

自然について知り、自然についての理解を深めるためには、子どもたちから身近な自然に親しみ、感動する体験を積み重ねることが、第一歩であることが指摘されている(小泉1993・1995)。穂坂(2013)は、深く自然を知り、理解を深めるためには、それぞれの地域の自然を題材に使うことが重要であると述べている。もし、里地里山が身近にあるならば、それらが題材として使われるべきではないだろうか。里山は観光資源や生活に活用していくことも可能である。だからこそ、現代の日本において里山を保全する必要があるといえる。

里山を保全していくためには、まず地域住民が里山の存在を知ることが第一歩になると思われる。そのためにも、里山という地域の資源の存在を地域住民に広報し広める必要があるといえる。

矢嶋ゼミでは2016年9月14日～16日の3日間にかけて、加古川市東神吉町神吉において、里山である神吉山の保全活動に関する聞き取り調査を行った。神吉山は、北山・中山・行者山・小山(前山)を総称して神吉山と呼ばれている。その神吉山は町内会の組織の一つであるふれあい里山会によって整備されている。また、町内会によって神吉山ウォーキングが行われているが、町内会での広報は回覧板のみであるとされる。

現在加古川市には、ウェルネス推進課が作成したというマップが存在する。そのマップは、31種類のウォーキングコースのマップであり、地域の歴史的背景や観光資源などにポイントを置いている。しかし、どのポイントに何があるか分かっていても、地形がわかりにくいため、ウォーキング以外での使用は難しい。また、里山を中心としたウォーキングコースは確認できなかった。ほかには、加古川観光協会では、加古川市内のハイキングコースや散策マップを作りイラストでおすすめの名所に触れている。例えば、高御位山登山マップや日岡緑とい

にしへの散歩みちなどがある。しかし、神吉山やその周辺について詳しく取りあげられているマップは見つけられなかった。

里山の存在を広めていく上で SNS やブログなどインターネットを使った広報は、里山のことに関心がないと調べないことや、単語がヒットしないと検索結果として表示されないことがあげられ、地域住民に対する広報には万能とは言えない。

そこで、里山広報班では神吉山をより効果的に地域住民に広報し広めるために、地図を用いた神吉山の広報の可能性について検討し、それにより神吉山の保全を目指す。そのために、地図を活用した事例や地域の情報を発信するために必要な研究を参考にして、研究対象とした神吉山の存在・魅力を地域住民に広めていく方法を具体的に提案していく。

研究は以下の通り進める。2 節では、小学生の子どもを持つ地域住民による東京近郊の小学校を拠点として考えた里山を活かした自然環境地図の事例と、東京都内の JR 主要駅の地域まちあるきマップの事例を紹介し、地図を使用した地域の情報発信の意義を考える。3 節では、加古川市東神吉町神吉と、ふれあい里山会の取り組みを明らかにし、広報の現状に触れる。4 節では、地図を用いた神吉山の広報の可能性を検討し、提案する。

2. 地図を活用した里山の情報発信と広報

本研究では、穂坂（2013）、有賀（2016）を参考に、ふれあい里山会や神吉山を地図によって広報していく方法を考察していく。

東京都調布市のカニ山の自然環境地図作成や、地域における自然教育の活動事例、将来に向けた効果的な自然教育について研究した穂坂（2013）は、対象の調布市でどれほどの地図が作られているか明らかにした。その結果、白黒版の詳細な手書き地図、市民と行政が協働して作成した地図、空中写真を用いた概要版が作成されていた。そこで既存の地図にはない歴史や自然を加えた地図を作成した（図 1）。地域の自然を知るために地図を用いる理由として、普段、自然にあまり関心のない人にとっても、自分たちが暮らす土地の土台である地形の成り立ちと自然環境との関わりについて理解することは重要であり、さらに地形図の読み取りを視野に入れたものを作り、解説も分かりやすい文章にすれば、多くの人が地域の自然についての理解を深めるきっかけになるとされる。

このように、地図が地域住民にとって自然環境を知るために大きな役割を果たすことが理解できるだろう。まさに百聞は一見にしかずであり、地域のことについてあまり知らなくても、地図を見ることで知識を得ることにつながるであろう。

行政広報以外のフリーペーパーのまちあるきマップが、東京都 23 区内のどのような場所に分布し、かつ、どのような特徴を持っているのかを研究した有賀（2016）は、地図が人と地域のつながりをより密にしているとともに、地域の活性化を図る手段としても利用され、幅広い分野において活用されていると述べた。そして、その地図の中でもフリーペーパーかつ、紙媒体の地図が観光客と地域住民の双方に、地域の活動を伝える情報手段として活用することができるとしている。

有賀は、地域まちあるきガイドマップの特徴として、東京駅型・秋葉原駅型・中野駅型に分けている。その中で、中野駅型を特に取り上げ考察し、その特徴として、街の紹介をメインとしており、ターゲット層を定めず、地域住民、観光客、偶然通りかかった人などすべての人がターゲットである点が挙げられている。また、施設情報やイベント項目に力を入れているものも多く存在し、その中でも各々の特色が出るよう、街の魅力を伝える工夫がなされているマップもあるという。

また、この中野駅型の中でも、手書きマップが置かれている日暮里駅の事例に注目すると、同駅では「日暮里周辺おさんぽ MAP 荒川区中心コース・台東区中心コース」(図2)が配布されており、これはJR東日本西日暮里駅が発行しているという。このマップは、地図を含むすべてが手書きのイラストマップであり、いずれのコースもトイレ・周辺地図の凡例がある。荒川区中心コースにはお花見スポット、台東区中心コースにはおすすめカメラスポットの凡例がある。

この「日暮里周辺おさんぽMAP」には“にゃっぼり”というゆるキャラが描かれており、このにゃっぼりが地図上で様々な解説を行っている。この解説はわかりやすい文章であり、前述の「分かりやすい文章にすれば理解が深まる」という点につながっていくといえる。また、ただの文章ではなく、キャラクターが解説を行うという事が、子ども達にとって地図への興味をそそることにつながるだろう。以上のように、地図を使用する意味とは、地域の自然を知らない人に自然についての理解を深めるきっかけになることや、地域と人とのつながりをより密にするといえる。

3. ふれあい里山会の広報につながる取り組みの現状



図1 カニ山周辺マップ
穂坂 (2013) より

神吉山には、里山の保全活動を行うふれあい里山会がある。保全活動の他に、里山を地域の学校に教材として提供する活動をしている。例えば、小山（前山）の山頂にある兵庫県立東播工業高校の製作したベンチ（写真1）や、東神吉小学校3年生が植樹を行ったサツキがそれにあたる。

ふれあい里山会は、町内会から予算が出ているが、ボランティアの運営となっているもののメンバーは引退したシニアの世代が多く在籍しており、若い世代の不足が課題となっている。

ふれあい里山会として広報はあまり行っていないことが聞き取り調査で分かっている。ふれあい里山会はブログでの情報発信を行っていたが、現在はブログの更新を行っていた会員の本業が多忙となり、2015年9月27日から更新されていない状態であった。その後、ブログを確認したところ、2016年10月24日に更新が行われていたが、写真のみの更新にとどまっていた。

現在はイベントの際に回覧板で広報を行っているが、ふれあい里山会や神吉山についての詳しい情報発信は十分にできていない状態であるという。

以上のことから、ふれあい里山会の広報は、イベント開催時以外は十分とはいえない状態であるといえる。そのため、神吉山の存在や魅力が町内に十分に知れ渡っておらず、地域住民の神吉山への関心を高めることにはつながっていないものと考えられる。神吉山の保全を行っているふれあい里山会の新たなメンバーを獲得するためにも広報を行い、地域住民の神吉山への関心を高めてもらい、ふれあい里山会の活動に意義を感じることができるような広報が必要となっていくだろう。

日暮里駅 [> 駅の情報] 2013年4月16日更新

自駅紹介 日暮里周辺おさんぽMAP

日暮里駅では、社員手作りの「日暮里周辺おさんぽMAP」を散策マップコーナーにて配布しております。

西口(台東区中心)と東口(荒川区中心)の散策マップがございますので、是非この機会に日暮里駅周辺の散策にお出かけ下さい。

日暮里駅社員一同、お客さまのお越しをお待ちしております。

- 西口(台東区中心)…谷中霊園をはじめ、お寺や神社が多く残る閑静な地域です。一方、昔ながらの風情を残す商店街はいつも活気にあふれ、地元の方はもちろん、観光で訪れるお客さまも多く、いつも賑わっています。
- 東口(荒川区中心)…下町の雰囲気色濃く残す町並みには、織物問屋街を中心に衣料品のお店がたくさんあり、近年は若いお客さまも多く見られます。
- 日暮里駅周辺おさんぽMAP配布箇所
JR日暮里駅北改札口正面
「日暮里駅周辺散策マップコーナー」
※日暮里周辺お散歩マップは数に限りがあります。

図2 日暮里周辺おさんぽMAP
JR 東日本日暮里駅ホームページによる。



写真1 東播工業高校製作のベンチ
2016年9月15日 大峪撮影

4. おわりに

本研究は、神吉山をより効果的に地域住民に広報し広めるために、地図を用いた神吉山の広報の可能性について検討し、それにより神吉山の保全を目指すものであった。

その中で見えてきた課題としては、神吉山の存在や魅力が町内に十分に知れ渡っておらず、地域住民が神吉山やその保全活動を行っているふれあい里山会に関心を持つことが難しくなっていることがあげられる。

神吉山の保全については、しばらくの間は現在のシニア世代のメンバーだけでも行うことが可能であろう。しかし、若い世代が加わらなければ今後どうなっていくかはわからない。そこで、地域の象徴である神吉山の様々な魅力を広報し、地域住民に認識させることができれば、神吉山の存在に意義を感じ、新たな里山会のメンバーの加入につながるかもしれない。また、保全に広報がどれほどの効果があるかはわからないが、地域住民が神吉山の存在を知っていけば、神吉山の保全活動に対する関心を持つ可能性が高まるといえるだろう。

加古川市で穂坂（2013）が描いたような自然環境地図を見つけることができなかった。地域住民が里山の存在を理解するためにも、自然環境地図が有効であるといえ、里山の存在を地図で広報していくことは里山の保全にもつながっていくだろう。

以上の課題を解決するために、里山広報班では地図を用いた広報を提案する。地図による広報は、地域住民への里山の存在・魅力の発信、また里山の保全だけでなく、地域ぐるみのつながりへと発展する可能性がある。神吉山の広報をしていく上では、最終的に地域住民全員が里山の魅力を発信するようになることを目標に広報を行うことを提案する。

まず、地図という紙媒体での広報は頻繁な更新を必要とせず、年に1回程度の更新で済むこともメリットとしてあげられる。また、今まで神吉山に立ち入ることのなかった地域住民にも神吉山を認識させることが可能といえる。

地図の作成にあたっては、2節で述べた自然環境地図やまちあるきマップを参考にする。理由として、作成した地図は地域住民への配布での広報がしやすいこと、そして、地図という紙媒体であればウォーキングで持ち歩くことができるからである。できあがった地図を町内会で配布する他、神吉山で行っている神吉山ウォーキングでも配布する。また、東神吉小学校・西神吉小学校・東神吉南小学校・神吉中学校・東播工業高校といった地元の小・中学校や高等学校の他、JA兵庫南ふぁ～みんSHOPかんき、コープこうべ神吉店といった商業施設、加古川ウェルネスパークや加古川市立図書館などで配布することも可能である。

地図の作成については、Microsoft Wordなどの簡単な一般的なパソコンソフトを使用する。そうすれば、コンピューターの専門的な知識を持つ人がいなくても、持続的に作成していくことが可能になる。また、町内会の役員が作成をおこなえば、ふれあい里山だけでなく町内会も協力して作成することになり、地域住民の神吉山についての関心も高まるだろう。

また、加古川観光協会には神吉山に関する地図がないため、観光協会に作成を依頼することも可能かもしれない。

実際に、地図に書き込んでいく内容について提案する。地図の元図にするのは、加古川市

役所都市計画課で販売されている 2500 分 1 加古川市域図で、町内会として許可を得て、スキャンした地図の画像を Word に取り込み、その上に書き込んでいく。具体的には、神吉山の歴史遺産や生き物、神吉山から見える景色の情報の他、神吉山で行われている神吉山ウォーキングに必要な情報、つまり登山のルートや注意箇所などを描くことで、神吉山に来てもらいやすくすることができるだろう。なお、景色の情報については、頂上からは高御位山や河川としての加古川、神戸製鋼所加古川製鉄所の他、自分達の住んでいる地区が見え、それについてのできるだけ詳細な情報を書き込めばいいだろう。それには加古川市教育委員会が発行している中学校社会科の郷土資料などを活用する。それらはウェルネスパーク図書館で閲覧することができる。また、3 章で生物班、5 章で歴史班が提案したマスコットキャラクター「カンキチ」を描いて解説をさせることで、子どもにも興味を持ってもらうことができるだろう。

今回提案した地図による広報は、文章や写真だけでは異なった情報を知らせることができる。その地図が、神吉山の保全だけでなく、神吉地区全体の活性化につながることを期待し、提案する。神吉山という存在が、神吉だけでなく地区外、さらには加古川市以外にもどんどん広がっていき、そこから神吉山の保全へとつながる活動が起こることを期待したい。

参考文献

- 有賀奈那 (2016) 「地域まちあるきガイドマップの分布と特徴—東京都 23 区内における JR 主要駅を事例として—」 法政地理 18, pp.71-82
- 小泉武栄 (1993) 『日本の山はなぜ美しい』 古今書院
- 小泉武栄 (1995) 『日本の自然を守る』 岩崎書店
- 穂坂由貴子 (2013) 「自然環境地図づくりから始まる身近な自然への理解—東京都調布市『カニ山周辺マップ』の事例—」 学芸地理 67, pp.103-112
- 加古川観光協会ホームページ (2017 年 1 月 20 日閲覧)
<http://kako-navi.jp/pamphlet.html>
- かこがわ・新コンセプトウォーキングコース (2016 年 12 月 22 日閲覧)
<http://www.city.kakogawa.lg.jp/soshikikarasagasu/chiikishinkobu/wellnesssuishinka/walking/1416120012761.html>
- 環境省ホームページ「環境白書」(2016 年 11 月 1 日閲覧)
<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h24/index.html>
- JR 東日本日暮里駅 (2016 年 11 月 9 日閲覧)
<http://www.jreast.co.jp/estation/station/info.aspx?StationCd=1184>
- 白川郷観光協会 (2016 年 11 月 25 日閲覧)
<http://www.shirakawa-go.gr.jp/top/>
- となりの里山—おいでよ広島の湯来町— (2016 年 11 月 25 日閲覧)
<http://e-yuki.net/>

ふれあい里山会のブログ (2016年12月21日閲覧)

<http://blogs.yahoo.co.jp/fureaisatoyama>